

U D L M

4

vol.318

April 30th
2022

Poetics of the City
都市、その原音までも

p.2-3 Poetics of the City
都市、その原音までも

p.4 新メンバー10名、新しい一歩

Poetics of the City

都市、その原音までも

人びとの思いを受け容れ
他者とつながる回路をつくり
様々な記憶を呼びおこす

そのような懐の深さを
都市と音楽はともにもつ

このように分かちがたく結びついた
〈都市 - 音楽 - 記憶〉の関係を
UDLM では4月号と6月号で見つめる

特に本号では主担当：若松，副担当：渡邊
および中島直人先生の個人の体験を通して
〈都市 - 音楽 - 記憶〉の関係を
風景の写真と記憶の記述から描き出す

新年度の始まるこの時期に改めて
都市の原音に耳を傾けよう

906 都市デザイン研究室



このまちにはどこか、のびやかな空気が漂っている

2012年、駒場にある高校に入学して感じたこのことは
2017年、大学に入って再び駒場を訪れるようになり
2022年、アメフトの練習のために駒場に通う今も
変わらないことのひとつだ



駒場を漂う、のびやかな空気に触れたとき
思わず、Oasis の Whatever を口ずさむ

素朴な和音、力の抜けた旋律、気だるいリズム
飾らない詞を口ずさめば
駒場のあちこちに転がる記憶が立ち上がり
こちらに向かって優しく、微笑みかけてくれる

WHATEVER x KOHABA

M2 WAKAMATSU



学生という時間が残り一年となった今も
口笛で Whatever を吹きながら
自転車で駒場を目指す

それでいい、きっと大丈夫
大切なあの頃には戻れなくても
大切なあの場所には戻れるのだから

Upside Down x Shibuya

Assoc. Prof. Nakajima

ジザメリめりこむ頭の中は晴れるわけがない。
渋谷のまちの谷底がどこにあるか知っている。
あの谷底には upside down が棲んでいる。

終わりにすると決めて落ち込んだその足で渋谷に下りていった。
気がつくと公園通りを下った丸井前の交差点にたっていた。
ヘッドフォンから upside down が流れてきた。



それまで何度も聴いてきたはずなのにその時は何かが違った。
交差点ごとぐらり沈みこんでいくように感じた。
倒れてきそうな都市の風景にめまいを覚えた。
音楽は地面のあちこちから噴き出ているようだった。

あ、いま、谷底にいる、そう思った。

自分をひっくりかえしたいと切実に願っていた。
しかしそんなことはできるはずがないとも思っていた。
数日間、高熱を出して寝込むことになった。
いよいよ都市工学科に進学する少し前のできごとだった。

ジザメリめりこむ頭の中は晴れるわけがない。
渋谷のまちの谷底がどこにあるか知っている。
あの谷底から私の人生は始まった。

Pacific x YOKOHAMA

M2 WATANABE

横浜を1人で歩く。
ふとした瞬間に、頭の中で Suchmos の Pacific が流れる。
夜の風や波の音がリズムと重なり、
思い出したくなかったことまで思い出してしまう。

桜木町駅の東口に着いた。
いつの間にか海も、歌詞を口ずさむ人も見えなくなっている。
過去の記憶まで波はさらってくれないんだな。



「一周歩いてから電車に乗ろう」
磯臭い向かい風に吹かれながら、
もう一度海辺に向かうことにした。

新メンバー 10 名、新しい一歩

今年度は新しく 9 名の修士 1 年生と 1 名の研究生が都市デザイン研究室に加わった。多様なバックグラウンドを持つ新メンバーたちは、どのような大学院生活を思い描いているのだろうか。今回はそんな彼・彼女たちに、①出身地 ②出身大学 ③好きなまちと『修士二年間の意気込み』を尋ねてみた。



伊藤 純也 Junya ITO

- ①東京都杉並区
- ②一橋大学社会学部
- ③ラパス（ポリビア）

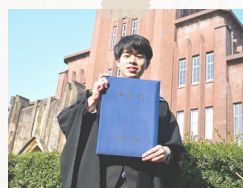
『できるだけ研究室に通う』



唐木田耕大 Kodai KARAKIDA

- ①東京都世田谷区
- ②東京大学農学部緑地環境学専修
- ③平泉

『知識・経験・人脈を広げる』



佐橋 慶祐 Keisuke SAHASHI

- ①埼玉県草加市
- ②東京大学工学部建築学科
- ③草津

『学生生活ラスト頑張るぞ』



高野 楓己 Funa TAKANO

- ①新潟県三条市
- ②新潟大学工学部工学科
- ③宇和島市遊子

『マルチタスクに強くなる』



橘 俊輔 Shunsuke TACHIBANA

- ①東京都世田谷区
- ②東京大学工学部都市工学科
- ③渋谷

『後悔しない二年間にする！』



永井鷹一郎 Yoichiro NAGAI

- ①東京都品川区
- ②鹿児島大学工学部建築学科
- ③鹿児島（天文館、西郷団地）

『充実の院生生活を送りたい』



長谷川帆奈 Hana HASEGAWA

- ①東京都板橋区
- ②横浜国立大学都市科学部
- ③豊島（てしま）

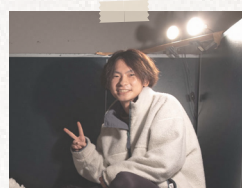
『頼れる大人になる』



平野 真帆 Maho HIRANO

- ①東京都板橋区
- ②東京大学工学部都市工学科
- ③松山

『冷静さの中に大胆さ』



森屋 友佑 Yusuke MORIYA

- ①東京都世田谷区
- ②東京大学工学部都市工学科
- ③中之島（大阪）

『コツコツ頑張ります』



Barbara Anna Matelowska (Basia)

- ① Jaworzno (Poland)
- ② Cracow University of Technology
- ③ Trogir (Croatia)

『I hope I can grow as an architect and researcher!』

ご挨拶

歴代の編集長がこれまでに述べられてきた「自主性」や「身勝手さ」、「着火剤」などのフレーズから、この都市デザイン研究室マガジンは、自己の思想・問いを外へと開く媒体を目指し、その役割を担ってきたことがわかります。昨年度の記事を振り返っても、研究室の活動や都市の見方を問ひかけ、自ら顧みるようなものが多くあったと感じます。

このようにマガジンは「都市デザイン研究室」と名が冠された媒体として、活動の単なる発信を超え、研究室そのもののそこに根づく個人の思想までを語るものです。このことを常に念頭に置き、今後も重要な DNA として受け継いでいきたいと思います。

一方で、発信のみに止まることなく、互いの考え・価値観を「シェア」できるような双方向型の媒体とすることが今年度の目標です。そのために、編集の過程から発行後まで、幅広く研究室内外での対話の場を設け、編集部だけではなく読者の方を巻き込んだ話づくりに挑戦していきます。

今年度の編集部は新たに修士一年の伊藤、佐橋、高野、橘、永井、長谷川、平野、森屋の八名を加えた歴代最多の計十三名で活動していきます。年々メンバーも増えており、多岐にわたる関心のもとでそれぞれの目を通して「都市デザイン研究室」を発信して参ります。どうかこれからも暖かく見守っていただきますと幸いです。

第一八代編集長

神谷 南帆

COLUMN

POSTSCRIPT

大らかな建築をつくりたい。懐の深い都市をつくりたい。そんな夢を密かに抱いていた青年は、学生最後の一年を迎えようとしていた。改めて、原点を見つめ直そう。都市の原音に、耳を傾けよう。そして学生最後の一年を、立派に過ごす糧としよう。このような想いから、本号は生まれた。これから彼は、都市をデザインしていく。彼の生を支えるものたちへの、ささやかな恩返しとして。（M2 若松）

WEB MAGAZINE

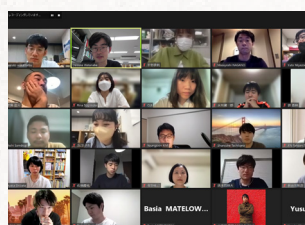
続きは都市デザイン研究室 HP で！

<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ia/blog/>



ホップ株分け会！

地元の皆さんとホップの株分け会を開催！9 株がなんと 20 株以上に。一部の株は地元の方が持ち帰り、手元で育ててくださることに。ある屋上から始まったホップ栽培が、不忍界隈に広がっていきます。（M2 池内）



研究会議：新入生自己紹介

新年度初回の研究会議では、新入生の自己紹介を毎年行っています。バックグラウンドが多様な 10 名の彼・彼女たちは、今後どのように都市デザイン研究室を彩ってくれるのでしょうか。（M2 渡邊）

BOOK OF THE MONTH



問合い

生態学的現象学の探究
河野哲也
東京大学出版会
2022

推薦者
M1 宮園

「問」という文字は「ま」「あいま」「あわい」「はざま」とも読める。これらは日本の古典的芸能にで経験される現象である。庭園にも見いだされるリズムの哲学は、決して日本固有のものではない。その普遍性は都市を対象としても見いだされるであろう。